

up \LaTeX 2 ϵ について

中野 賢 & 日本語 \TeX 開発コミュニティ & TTK

作成日：2020/09/28

up \LaTeX は、内部コードを Unicode 化した p \LaTeX の拡張版です。このバージョンは、「コミュニティ版 p \LaTeX 2 ϵ 」をベースにしています。

p \TeX は、高品質の日本語組版ソフトウェアとしてデファクトスタンダードの地位にあるといえます。しかし、p \TeX には

- 直接使える文字集合が原則的に JIS X 0208 (JIS 第 1,2 水準) の範囲に限定されていること、
- 8bit の非英語欧文との親和性が高いとは言えないこと、
- p \TeX の利用が日本語に限られ、中国語・韓国語との混植への利用が進んでいないこと

といった弱点がありました。

これらの弱点を克服するため、p \TeX の内部コードを Unicode 化した拡張版が up \TeX です。また、up \TeX 上で用いる Unicode 版 p \LaTeX が up \LaTeX です¹。現在の up \LaTeX は、日本語 \TeX 開発コミュニティが配布しているコミュニティ版 p \LaTeX ² をベースにしており、 ϵ -up \TeX というエンジン (up \TeX の ϵ -p \TeX 拡張版) で動作します。

開発中の版は p \LaTeX と同様に、GitHub のリポジトリ³で管理しています。up \LaTeX はアスキーとは無関係ですので、バグレポートはアスキー宛てではなく、日本語 \TeX 開発コミュニティに報告してください。 \TeX Forum や GitHub の Issue システムが利用できます。

¹<http://www.t-lab.opal.ne.jp/tex/uptex.html>

²<https://github.com/texjporg/platex>

³<https://github.com/texjporg/uplatex>

1 この文書について

この文書は $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ の概要を示していますが、使い方のガイドではありません。ほとんどの機能は元となっている $\text{pL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ や $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ と同等ですので、それぞれの付属文書などを参照してください。

$\text{upT}_{\text{E}}\text{X}$ については公式ウェブサイトあるいは [1] (英語) を参照してください。この文書の構成は次のようになっています。

第 1 節 この節です。この文書についての概要を述べています。

第 2 節 $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ で拡張した機能についての概要です。付属のクラスファイルやパッケージファイルについても簡単に説明しています。

第 3 節 現在のバージョンの $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ と旧バージョン、あるいは元となっている $\text{pL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}/\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ との互換性について述べています。

付録 A この文書ソース (`uplatex.dtx`) の `DOCSTRIP` のためのオプションについて述べています。

付録 B $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ の `dtx` ファイルをまとめて、一つのソースコード説明書にするための文書ファイルの説明をしています。

付録 C 付録 B で説明した文書ファイルを処理する `sh` スクリプト (手順) などについて説明しています。

2 $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ の機能について

$\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ が提供するファイルは、次の 3 種類に分類することができます。この構成は $\text{pL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X } 2_{\epsilon}$ と同様です。

- フォーマットファイル
- クラスファイル
- パッケージファイル

2.1 フォーマットファイル

$\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ のフォーマットファイルを作成するには、ソースファイル “`uplatex.ltx`” を $\epsilon\text{-upT}_{\text{E}}\text{X}$ の INI モードで処理します⁴。ただし、 $\text{T}_{\text{E}}\text{X Live}$ や $\text{W32T}_{\text{E}}\text{X}$ ではこの処

⁴2016 年以前は $\text{upT}_{\text{E}}\text{X}$ と $\epsilon\text{-upT}_{\text{E}}\text{X}$ のどちらでもフォーマットを作成することができましたが、2017 年に $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ が $\epsilon\text{-T}_{\text{E}}\text{X}$ 必須となったことに伴い、 $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ も $\epsilon\text{-upT}_{\text{E}}\text{X}$ が必須となりました。

理を簡単にする `fmtutil-sys` あるいは `fmtutil` というプログラムが用意されています。以下を実行すれば、フォーマットファイル `uplatex.fmt` が作成されます。

```
fmtutil-sys --byfmt uplatex
```

次のリストが、`uplatex.ltx` の内容です。ただし、このバージョンでは、 \LaTeX から $\text{up}\text{\LaTeX}$ への拡張を `plcore.ltx` ($\text{p}\text{\LaTeX}$ によって提供される) および `uplcore.ltx` をロードすることで行ない、`latex.ltx` には直接、手を加えないようにしています。したがって `uplatex.ltx` はとても短いものとなっています。`latex.ltx` には \LaTeX のコマンドが、`uplcore.ltx` には $\text{up}\text{\LaTeX}$ で拡張したコマンドが定義されています。

```
1 \*plcore)
```

`latex.ltx` の末尾で使われている `\dump` をいったん無効化します。

```
2 \let\orgdump\dump
3 \let\dump\relax
```

`latex.ltx` を読み込みます。 \TeX Live の標準的インストールでは、この中で `Babel` 由来のハイフネーション・パターン `hyphen.cfg` が読み込まれるはずですが。

```
4 \input latex.ltx
```

`plcore.ltx` と `uplcore.ltx` を読み込みます。

```
5 \typeout{*****^J%
6      *^J%
7      * making upLaTeX format^J%
8      *^J%
9      *****}
10 \makeatletter
11 \input plcore.ltx
12 \input uplcore.ltx
```

フォント関連のデフォルト設定ファイルである、`upldefs.ltx` を読み込みます。 \TeX の入力ファイル検索パスに設定されているディレクトリに `upldefs.cfg` ファイルがある場合は、そのファイルを使います。読み込み後にコードが実行されるかもしれません。

```
13 \InputIfFileExists{upldefs.cfg}
14     {\typeout{*****^J%
15             * Local config file upldefs.cfg used^J%
16             *****}%
17     {\input{upldefs.ltx}}
18 \ifx\code@after@pldefs\@undefined\else \code@after@pldefs \fi
```

以前のバージョンでは、フォーマット作成時に $\text{up}\text{\LaTeX}$ のバージョンがわかるように、端末に表示していましたが、`\everyjob` にバナー表示以外のコードが含まれる可能性を考慮し、安全のためやめました。

```
19 %\the\everyjob
```

upL^AT_εX 2_ε の起動時に uplatex.cfg がある場合、それを読み込むようにします (pL^AT_εX 2_ε が platex.cfg を読み込むのと同様)。バージョン 2016/07/01 ではコードを uplcore.ltx に入れていましたが、uplatex.ltx へ移動しました。

```
20 \everyjob\expandafter{%
21   \the\everyjob
22   \IfFileExists{uplatex.cfg}{%
23     \typeout{*****^J%
24       * Loading uplatex.cfg.^J%
25       *****}%
26   \input{uplatex.cfg}}{%
27 }
```

フォーマットファイルにダンプします。

```
28 \let\dump\orgdump
29 \let\orgdump\@undefined
30 \makeatother
31 \dump
32 %\endinput
33 </plcore>
```

実際に upL^AT_εX 2_ε への拡張を行なっている uplcore.ltx は、DOCSTRIP プログラムによって、次のファイルの断片が連結されたものです。

- uplvers.dtx は、upL^AT_εX 2_ε のフォーマットバージョンを定義しています。

また、プリロードフォントや組版パラメータなどのデフォルト設定は、uplatex.ltx の中で upldefs.ltx をロードすることにより行います⁵。このファイル upldefs.ltx も uplfonts.dtx から生成されます。

注意：

このファイルに記述されている設定を変更すれば upL^AT_εX 2_ε をカスタマイズすることができますが、その場合は upldefs.ltx を直接修正するのではなく、いったん upldefs.cfg という名前でコピーして、そのファイルを編集してください。フォーマット作成時に upldefs.cfg が存在した場合は、そちらが upldefs.ltx の代わりに読み込まれます。

ここまで見てきたように、upL^AT_εX の各ファイルはそれぞれ pL^AT_εX での対応するファイル名の頭に “u” を付けた名前になっています。

2.1.1 バージョン

upL^AT_εX 2_ε のバージョンやフォーマットファイル名は、uplvers.dtx で定義しています。これは、pL^AT_εX 2_ε のバージョンやフォーマットファイル名が plvers.dtx

⁵旧版では uplcore.ltx の中でロードしていましたが、2018 年以降の新しいコミュニティ版 upL^AT_εX では uplatex.ltx から読み込むことにしました。

で定義されているのと同じです。

2.1.2 NFSS2 コマンド

upL^AT_ΕX 2_ε は pL^AT_ΕX 2_ε と共通の plcore.ltx を使用していますので、NFSS2 の和文フォント選択への拡張が有効になっています。

2.1.3 出力ルーチンとフロート

upL^AT_ΕX 2_ε は pL^AT_ΕX 2_ε と共通の plcore.ltx を使用していますので、出力ルーチンや脚注マクロなどは pL^AT_ΕX 2_ε と同じように動作します。

2.2 クラスファイルとパッケージファイル

upL^AT_ΕX 2_ε が提供をするクラスファイルやパッケージファイルは、pL^AT_ΕX 2_ε に含まれるファイルを基にしています。

upL^AT_ΕX 2_ε に付属のクラスファイルは、次のとおりです。

- ujournal.cls, ujournalbook.cls, ujournalreport.cls
横組用の標準クラスファイル。ujclasses.dtx から作成される。それぞれ journal.cls, journalbook.cls, journalreport.cls の upL^AT_ΕX 版。
- utarticle.cls, utbook.cls, utreport.cls
縦組用の標準クラスファイル。ujclasses.dtx から作成される。それぞれ article.cls, book.cls, report.cls の upL^AT_ΕX 版。

なお jltxdoc.cls の upL^AT_ΕX 版はありませんが、これは pL^AT_ΕX のものが upL^AT_ΕX でもそのまま使えます。

また、upL^AT_ΕX 2_ε に付属のパッケージファイルは、次のとおりです。

- uptrace.sty
ptrace.sty の upL^AT_ΕX 版。L^AT_ΕX でフォント選択コマンドのトレースに使う tracefnt.sty が再定義してしまう NFSS2 コマンドを、upL^AT_ΕX 2_ε 用に再々定義するためのパッケージ。uplfonts.dtx から作成される。

他の pL^AT_ΕX のパッケージは、upL^AT_ΕX でもそのまま動作します。

3 他のフォーマット・旧バージョンとの互換性

ここでは、この upL^AT_ΕX 2_ε のバージョンと以前のバージョン、あるいは pL^AT_ΕX 2_ε/L^AT_ΕX 2_ε との互換性について説明をしています。

3.1 p \LaTeX 2 ϵ および \LaTeX 2 ϵ との互換性

up \LaTeX 2 ϵ は、p \LaTeX 2 ϵ の上位互換という形を取っていますので、クラスファイルやいくつかのコマンドを置き換えるだけで、たいていの p \LaTeX 2 ϵ 文書を簡単に up \LaTeX 2 ϵ 文書に変更することができます。ただし、up \LaTeX 2 ϵ のデフォルトの日本語フォントメトリックは p \LaTeX 2 ϵ のそれと異なりますので、レイアウトが変化することがあります。また、 \LaTeX 2 ϵ のいくつかの命令の定義も変更していますので、 \LaTeX 2 ϵ で処理できるファイルを up \LaTeX 2 ϵ で処理した場合に完全に同じ結果になるとは限りません。

また、up \LaTeX 2 ϵ は新しいマクロパッケージですので、2.09 互換モードをサポートしていません。 \LaTeX 2 ϵ の仕様に従ってドキュメントを作成してください。

p \LaTeX 2 ϵ 向けあるいは \LaTeX 2 ϵ 向けに作られた多くのクラスファイルやパッケージファイルはそのまま使えると思います。ただし、例えばクラスファイルが p \LaTeX 標準の漢字エンコーディング (JY1, JT1) を前提としている場合は、up \LaTeX で採用した漢字エンコーディング (JY2, JT2) と合致せずにエラーが発生してしまいます。この場合は、そのクラスファイルが up \LaTeX に対応していないことになります。このような場合は、p \LaTeX を使い続けるか、その作者に連絡して up \LaTeX に対応してもらうなどの対応をとってください。

3.2 latexrelease パッケージへの対応

\LaTeX <2015/01/01>で導入された latexrelease パッケージをもとに、新しい p \LaTeX では latexrelease パッケージが用意されました。本来は up \LaTeX でも同様のパッケージを用意するのがよいのですが、現在は p \LaTeX から up \LaTeX への変更点が含まれていませんので、幸い latexrelease パッケージをそのまま用いることができます。このため、up \LaTeX で独自のパッケージを用意することはしていません。latexrelease パッケージを用いると、過去の up \LaTeX をエミュレートしたり、フォーマットを作り直すことなく新しい up \LaTeX を試したりすることができます。詳細は latexrelease のドキュメントを参照してください。

A DOCSTRIP プログラムのためのオプション

この文書のソース (uplatex.dtx) を DOCSTRIP プログラムで処理することによって、いくつかの異なるファイルを生成することができます。DOCSTRIP プログラムの詳細は、docstrip.dtx を参照してください。

この文書の DOCSTRIP プログラムのためのオプションは、次のとおりです。

オプション	意味
plcore	フォーマットファイルを作るためのファイルを生成
pldoc	upL ^A T _ε X のソースファイルをまとめて組版するための文書ファイル (upldoc.tex) を生成
shprog	上記のファイルを作成するための sh スクリプトを生成
Xins	上記の sh スクリプトや perl スクリプトを取り出すための DOCSTRIP バッチファイル (Xins.ins) を生成

B 文書ファイル

ここでは、このパッケージに含まれている dtx ファイルをまとめて組版し、ソースコード説明書を得るための文書ファイル `upldoc.tex` について説明をしています。個別に処理した場合と異なり、変更履歴や索引も付きます。

デフォルトではソースコードの説明が日本語で書かれます。もし英語の説明書を読みたい場合は、

```
\newif\ifJAPANESE
```

という内容の `uplatex.cfg` を予め用意してから `upldoc.tex` を処理してください (2016 年 7 月 1 日以降の upL^AT_εX が必要)。

コードは pL^AT_εX のものと (ファイル名を除き) ほぼ同一なので、ここでは違っている部分だけ説明します。

```
34 (*pldoc)
35 \begin{filecontents}{upldoc.dic}
36 西暦   せいれき
37 和暦   われき
38 \end{filecontents}
```

pL^AT_εX のドキュメントでは、`plext.dtx` の中で組み立てるサンプルのために `plext` パッケージが必要ですが、upL^AT_εX のファイルにはそのようなサンプルが含まれないので除外しています。

```
39 \documentclass{jltxdoc}
40 %\usepackage{plext} %% comment out for upLaTeX
41 \listfiles
42
43 \DoNotIndex{\def,\long,\edef,\xdef,\gdef,\let,\global}
44 \DoNotIndex{\if,\ifnum,\ifdim,\ifcat,\ifmmode,\ifvmode,\ifhmode,%
45             \iftrue,\iffalse,\ifvoid,\ifx,\ifeof,\ifcase,\else,\or,\fi}
46 \DoNotIndex{\box,\copy,\setbox,\unvbox,\unhbox,\hbox,%
47             \vbox,\vtop,\vcenter}
48 \DoNotIndex{@empty,\immediate,\write}
49 \DoNotIndex{\egroup,\bgroup,\expandafter,\begingroup,\endgroup}
```

```

50 \DoNotIndex{\divide, \advance, \multiply, \count, \dimen}
51 \DoNotIndex{\relax, \space, \string}
52 \DoNotIndex{\csname, \endcsname, \@spaces, \openin, \openout, %
53         \closein, \closeout}
54 \DoNotIndex{\catcode, \endinput}
55 \DoNotIndex{\jobname, \message, \read, \the, \m@ne, \noexpand}
56 \DoNotIndex{\hsize, \vsize, \hskip, \vskip, \kern, \hfil, \hfill, \hss, \vss, \unskip}
57 \DoNotIndex{\m@ne, \z@, \z@skip, \@ne, \tw@, \p@, \@minus, \@plus}
58 \DoNotIndex{\dp, \wd, \ht, \setlength, \addtolength}
59 \DoNotIndex{\newcommand, \renewcommand}
60
61 \ifJAPANESE
62 \IndexPrologue{\part*{索引}}%
63         \markboth{索引}{索引}%
64         \addcontentsline{toc}{part}{索引}%
65 イタリア体の数字は、その項目が説明されているページを示しています。
66 下線の引かれた数字は、定義されているページを示しています。
67 その他の数字は、その項目が使われているページを示しています。}
68 \else
69 \IndexPrologue{\part*{Index}}%
70         \markboth{Index}{Index}%
71         \addcontentsline{toc}{part}{Index}%
72 The italic numbers denote the pages where the corresponding entry
73 is described, numbers underlined point to the definition,
74 all others indicate the places where it is used.}
75 \fi
76 %
77 \ifJAPANESE
78 \GlossaryPrologue{\part*{変更履歴}}%
79         \markboth{変更履歴}{変更履歴}%
80         \addcontentsline{toc}{part}{変更履歴}}
81 \else
82 \GlossaryPrologue{\part*{Change History}}%
83         \markboth{Change History}{Change History}%
84         \addcontentsline{toc}{part}{Change History}}
85 \fi
86
87 \makeatletter
88 \def\changes@#1#2#3{%
89   \let\protect\@unexpandable@protect
90   \edef\@tempa{\noexpand\glossary{#2\space
91         \currentfile\space#1\levelchar
92         \ifx\saved@macroname\@empty
93           \space\actualchar\generalname
94         \else
95           \expandafter\@gobble
96           \saved@macroname\actualchar
97           \string\verb\quotechar*%
98           \verbatimchar\saved@macroname
99           \verbatimchar

```

```

100             \fi
101             :\levelchar #3}}%
102 \@tempa\endgroup\@esphack}
103 \renewcommand*\MacroFont{\fontencoding\encodingdefault
104             \fontfamily\ttdefault
105             \fontseries\mddefault
106             \fontshape\updefault
107             \small
108             \hfuzz 6pt\relax}
109 \renewcommand*\l@section{\@dottedtocline{2}{1.5em}{2.8em}}
110 \renewcommand*\l@subsubsection{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.4em}}
111 \makeatother
112 \RecordChanges
113 \CodelineIndex
114 \EnableCrossrefs
115 \setcounter{IndexColumns}{2}
116 \settothewidth\MacroIndent{\ttfamily\scriptsize 000\ }

この文書のタイトル・著者・日付を設定します。
117 \title{The \upLaTeX\ Sources}
118 \author{Ken Nakano \& Japanese \TeX\ Development Community \& TTK}
119
120 % Get the (temporary) date and up-patch level from uplvers.dtx
121 \makeatletter
122 \let\patchdate=\@empty
123 \begingroup
124   \def\ProvidesFile#1[#2 #3]#4\def\uppatch@level#5{%
125     \date{#2}\xdef\patchdate{#5}\endinput}
126   \input{uplvers.dtx}
127 \endgroup
128
129 % Add the patch version if available.
130 \def\Xpatch{}
131 \ifx\patchdate\Xpatch\else
132   \edef\@date{\@date\space version \patchdate}
133 \fi
134
135 % Obtain the last update info, as upLaTeX does not change format date
136 % -> if successful, reconstruct the date completely
137 \def\lastupd@te{0000/00/00}
138 \begingroup
139   \def\ProvidesFile#1[#2 #3]{%
140     \def\@tempd@te{#2}\endinput
141     \@ifl@t@r{\@tempd@te}{\lastupd@te}{%
142       \global\let\lastupd@te\@tempd@te
143     }}
144   \let\ProvidesClass\ProvidesFile
145   \let\ProvidesPackage\ProvidesFile
146   \input{uplvers.dtx}
147   \input{uplfonts.dtx}

```

```

148 \input{ukinsoku.dtx}
149 \input{ujclasses.dtx}
150 \endgroup
151 \@ifl@t@r{\lastupd@te}{0000/00/00}{%
152 \date{Version \patchdate\break (last updated: \lastupd@te)}}%
153 }{}
154 \makeatother

    ここからが本文ページとなります。

155 \begin{document}
156 \pagenumbering{roman}
157 \maketitle
158 \renewcommand\maketitle{}
159 \tableofcontents
160 \clearpage
161 \pagenumbering{arabic}
162
163 \DocInclude{uplvers} % upLaTeX version
164
165 \DocInclude{uplfonts} % NFSS2 commands
166
167 \DocInclude{ukinsoku} % kinsoku parameter
168
169 \DocInclude{ujclasses} % Standard class
170
171 \StopEventually{\end{document}}
172
173 \clearpage
174 \pagestyle{headings}
175 % Make TeX shut up.
176 \hbadness=10000
177 \newcount\hbadness
178 \hfuzz=\maxdimen
179 %
180 \PrintChanges
181 \clearpage
182 %
183 \begingroup
184 \def\endash{--}
185 \catcode'\-\active
186 \def-\{\futurelet\temp\indexdash}
187 \def\indexdash{\ifx\temp-\endash\fi}
188
189 \PrintIndex
190 \endgroup
191 \let\PrintChanges\relax
192 \let\PrintIndex\relax
193 \end{document}
194 </pldoc>

```

C おまけプログラム

C.1 シェルスクリプト `mkpldoc.sh`

`upLATEX 2ε` のマクロ定義ファイルをまとめて組版し、変更履歴と索引も付けるときに便利なシェルスクリプトです。このシェルスクリプトの使用方法は次のとおりです。

```
sh mkpldoc.sh
```

コードは `pLATEX 2ε` のものと（ファイル名を除き）ほぼ同一なので、ここでは違う部分だけ説明します。

```
195 ⟨*shprog⟩
196 ⟨ja⟩rm -f upldoc.toc upldoc.idx upldoc.glo
197 ⟨en⟩rm -f upldoc-en.toc upldoc-en.idx upldoc-en.glo
198 echo "" > ltxdoc.cfg
199 ⟨ja⟩uplAtex upldoc.tex
200 ⟨en⟩uplAtex -jobname=upldoc-en upldoc.tex
```

変更履歴や索引の生成には `mendex` を用いますが、`upLATEX` の場合は UTF-8 モードで実行する必要がありますので、`-U` というオプションを付けます⁶。`makeindex` コマンドには、このオプションがありません。

```
201 ⟨ja⟩mendex -U -s gind.ist -d upldoc.dic -o upldoc.ind upldoc.idx
202 ⟨en⟩mendex -U -s gind.ist -d upldoc.dic -o upldoc-en.ind upldoc-en.idx
203 ⟨ja⟩mendex -U -f -s gglo.ist -o upldoc.gls upldoc.glo
204 ⟨en⟩mendex -U -f -s gglo.ist -o upldoc-en.gls upldoc-en.glo
205 echo "\includeonly{" > ltxdoc.cfg
206 ⟨ja⟩uplAtex upldoc.tex
207 ⟨en⟩uplAtex -jobname=upldoc-en upldoc.tex
208 echo "" > ltxdoc.cfg
209 ⟨ja⟩uplAtex upldoc.tex
210 ⟨en⟩uplAtex -jobname=upldoc-en upldoc.tex
211 # EOT
212 ⟨/shprog⟩
```

C.2 perl スクリプト `dstcheck.pl`

`pLATEX 2ε` のものがそのまま使えるので、`upLATEX 2ε` では省略します。

C.3 DOCSTRIP バッチファイル

付録 C.1 で説明をしたスクリプトを、このファイルから取り出すための `DOCSTRIP` バッチファイルです。コードは `pLATEX 2ε` のものと（ファイル名を除き）ほぼ同一なので、説明は割愛します。

⁶`uplAtex` コマンドも実際には UTF-8 モードで実行する必要がありますが、デフォルトの内部漢字コードが UTF-8 に設定されているはずですので、`-kanji=utf8` を付けなくても処理できると思います。

```
213 <*Xins>
214 \input docstrip
215 \keepsilent

216 {\catcode'#=12 \gdef\MetaPrefix{## }}

217 \declarepreamble\thispre
218 \endpreamble
219 \usepreamble\thispre

220 \declarepostamble\thispost
221 \endpostamble
222 \usepostamble\thispost

223 \generate{
224   \file{mkpldoc.sh}{\from{uplatex.dtx}{shprog,ja}}
225   \file{mkpldoc-en.sh}{\from{uplatex.dtx}{shprog,en}}
226 }
227 \endbatchfile
228 </Xins>
```

参考文献

- [1] Takuji Tanaka, UpTeX — Unicode version of pTeX with CJK extensions
TUGboat issue 34:3, 2013.
(<http://tug.org/TUGboat/tb34-3/tb108tanaka.pdf>)

変更履歴

2011/05/07 v1.0c-u00	2017/12/05 v1.0s-u01
<ul style="list-style-type: none"> • p\LaTeX 用から up\LaTeX 用に修正。 (based on platex.dtx 1997/01/29 v1.0c) 1 	<ul style="list-style-type: none"> • デフォルト設定ファイルの読み込みを <code>uplcore.ltx</code> から <code>uplatex.ltx</code> へ移動 (based on platex.dtx 2017/12/05 v1.0s) . . . 3
2016/05/08 v1.0h-u00	2017/12/10 v1.0s-u02
<ul style="list-style-type: none"> • ドキュメントから <code>uplpatch.ltx</code> を除外 (based on platex.dtx 2016/05/08 v1.0h) 9 	<ul style="list-style-type: none"> • <code>uplcore.ltx</code> の前に <code>plcore.ltx</code> を読み込むようにした (最近の p\LaTeX が前提) 3
2016/06/06 v1.0k-u01	2018/04/08 v1.0w-u02
<ul style="list-style-type: none"> • up\LaTeX 用にドキュメントを全体的に改訂 1 	<ul style="list-style-type: none"> • 安全のためフォーマット作成時のバナー表示をやめた (based on platex.dtx 2018/04/08 v1.0w) . . . 3
2016/06/19 v1.0l-u01	2018/09/03 v1.0x-u02
<ul style="list-style-type: none"> • パッチレベルを <code>uplvers.dtx</code> から取得 (based on platex.dtx 2016/06/19 v1.0l) 9 	<ul style="list-style-type: none"> • ドキュメントを更新 (based on platex.dtx 2018/09/03 v1.0x) . . . 1
2016/08/26 v1.0m-u01	2018/09/22 v1.0y-u02
<ul style="list-style-type: none"> • <code>uplatex.cfg</code> の読み込みを <code>uplcore.ltx</code> から <code>uplatex.ltx</code> へ移動 (based on platex.dtx 2016/08/26 v1.0m) 4 	<ul style="list-style-type: none"> • 最終更新日を <code>upldoc.pdf</code> に表示 (based on platex.dtx 2018/09/22 v1.0y) 9
2017/11/29 v1.0q-u01	2019/05/22 v1.0y-u03
<ul style="list-style-type: none"> • 英語版ドキュメントを追加 (based on platex.dtx 2017/11/29 v1.0q) 1 	<ul style="list-style-type: none"> • ドキュメントを更新 1
	2020/09/28 v1.1b-u03
	<ul style="list-style-type: none"> • <code>defs</code> 読込後にフック追加 3